

〈研究ノート〉

## 若者文化とセクシュアリティ

—カルチュラルスタディーズをめぐって—

川原 ゆかり

### はじめに

近年、わが国においても、若者のセクシュアリティに関する研究関心は高まりつつある。思春期の性行動に関しては、日本性教育協会等により、大規模な全国調査が行われ、青少年の性経験の増加が浮き彫りにされている<sup>1</sup>。また、少女のセクシュアリティを近代との関連で論じた川村（1994）の研究は、現代の「援助交際言説」を考える上で有益である。さらに、芹沢（1991）は、メディアのなかの少女の性の表象、性のマニュアル化がもたらしたものについて考察する。その他、宮台（1994, 1996）は、少女売春を近代の成熟という社会変動との関連において分析している。

近年、佐藤（1993）は、わが国の思春期の性行動研究の過去10年間の動向をまとめた。そのなかで、佐藤は、わが国における思春期の性行動に関する文献は増加しているものの、思春期の性行動選択の要因を探る実証的研究があまりなされておらず、個々のケースを丹念に追う事例研究が必要であることを指摘している。英国では、1970年頃より、カルチュラルスタディーズの視点から、優れた若者文化のエスノグラフィー研究が次々と産み出され、若者がどのように自分の行動、経験の意味づけを行っているかを明らかにする研究がおこなわれてきている。本稿では、こうしたカルチュラルスタディーズをめぐり動向を中心にとりあげて、今後のわが国の若者のセクシュアリティ研究にどのように活用すべきかを検討してみたい。

### 1. セクシュアリティ、パワー、そして個人の経験

1980年代以降、セクシュアリティ研究は欧米のアカデミアにおいていわゆる「ブーム」を巻き起こし、今日までに多数の優れた研究が産み出されてきた。このブームの引き金となったのが、いうまでもなく、フランスの哲学者ミシェル・フーコーの著作『性の歴史』（Foucault 1976）である。

フーコーは、セクシュアリティが、身体の「生来的 innate」な性質を表現するものでなく、ある特定のパワー関係によって構築されているものであると主張した。彼は、資本主義の発展と共に、人口全体を管理し、その生産力を最大化するための様々な技術としての新たなパワーを「生権力 Bio-power」とネーミングし、セクシュアリティ研究に「正当性」を与えたともいえる。しかしながら、フーコーの最大の貢献は、セクシュアリティというきわめて定義の難しい概念を持ち込むことにより<sup>2</sup>、セックス＝生物学的性別、ジェンダー＝社会的文化的性別とするフェミニズムの二元論に疑問を呈したことである。彼は、セクシュアリティもまたパワーの影響下で、社会文化的に構築されると主張する（Foucault 1976, 1980）。

やがて、フーコーの研究は、セクシュアリティを生物学的に所与のものとする「本質主義 essentialism」を批判するポスト構造主義のフェミニズム研究に多大な影響を及ぼすに至った。1980年代以降、多数の研究者が、様々な角度から、セクシュアリティは、ある特定の歴史的、政治的、社会文化的コンテキストにおける支配的イデオロギーによって構築されてきたと論じるようになるのである（Weeks 1985, Jackson 1987, Laqueur 1990, Bordo 1989, 1993）。たとえば、ジャクソン（Jackson 1987）は、ハヴロック・エリスを始めとする西欧のセク

ソロジー研究が、ヘテロセクシュアリティを前提に、男性の利益を促進するよう女性のセクシュアリティを構築してきたと主張する。また、ラカー (Laqueur 1990) は、彼の著書のタイトル、*Making Sex* が示すとおり、ギリシア時代の解剖学からフロイドまでの身体の表象が、「ジェンダーの政治学」と深く関連してきた事実を歴史的に考察している。また、ボード (Bordo 1989,1993) は、身体を「女らしさのテキスト a text of femininity」と定義し、拒食症の分析を通して、女性の身体が、支配的な「女らしさ」のイデオロギーによって構築されている様を描き出した。

ポストモダニズムのセクシュアリティ研究は欧米に焦点を置きがちであったが、日本社会へも、探究の手を伸ばすことになる。なかでも、ロック (Lock 1987,1988,1993) は、日本において、「更年期障害」が暇をもてあます主婦の「ぜいたく病 luxury disease」と表象されていることに着目し、この病気の言説と、国家の福祉政策（それは、家族や年老いた親を介護する責任を女性に押し付けるものであるが）との関連を指摘している。このように、ポスト構造主義のフェミニズム研究者達によって、支配的パワーが人々のセクシュアリティの構築に関与してきた様が頻繁に論じられるようになる。

確かに、ロスやラップ (Ross and Rapp 1983 : 72) が指摘するように、「セクシュアリティの政治化 the politicization of sexuality」は顕著であり、国家は中絶問題、性教育、家族政策、福祉政策を通して、国民のセクシュアリティに介入してきている。しかしながら、これら政府の政策が実際に人々のセクシュアリティ経験にどのような影響を及ぼしているのかという重要な点は、未だあまり解明されていない。ここに、フーコーを支持したフェミニズム研究者達のなかから、フーコー批判が生まれる由縁がある。

とりわけ、マクネイ (McNay) は、フーコーの「一枚岩的な、一方向性のパワーの概念 the monolithic, unidirectional notion of power」(McNay 1991 : 133) に疑問を投げかける。もちろん、マクネイは、フーコーが、トップダウンとしての単純な権力概念を否定し、それを拡散的、増殖的と捉えていることは承知している<sup>3</sup>。にもかかわらず、フーコーの文脈のなかで、実際には、「権力関係は、どのようにそれが制度に装置されたかという観点からのみ考察され、パワーの影響下にある人々の視点からは考察されていない」(McNay 1991 : 134) と指摘する。このことは、個人の経験の多様性、複雑性を再発見し、再評価しようとするポスト構造主義のフェミニズムの狙いと明らかに食い違う。ペイス (Peiss 1989)、マーティン (Martin 1990)、マクネイ (McNay 1991) らが指摘するように、セクシュアリティに関しての支配的言説を解釈する様は、階級、ジェンダーにより相違を見せる。それゆえ、「主体的行為 Agency」についての議論ぬきには、階級やジェンダーによる個人の経験の多様性は語れない。

社会構造 Structure / 主体的行為 Agency の関係は長い間、社会科学の理論のなかで争点となってきた。とりわけ、若者のセクシュアリティを研究する際、「主体的行為」への着目は彼等の抵抗 resistance 行動を説明するうえで、不可欠となってくる。国家のパワーは、伝統的なセクシュアリティ観やジェンダー役割といったものを強化すると同時に、破壊し、それを覆えす効果をも持っているということを忘れてはならない (Smith-Rosenberg 1986, Mort 1987, McNay 1991, Robertson 1992)。

ペイス (Peiss 1989) は、1880年から1920年にかけて、ニューヨーク市における若い世代の労働者階級の女性の生活を考察している。そこで、彼女達が当時支配的であったところの婚前交渉を否定する中流階級のイデオロギーとは性質を異にするセクシュアリティ文化を構築していることを発見している。ペイスの描く労働者階級の若い女性達のように、人間は自分自身の目的と意図を持って、自分のセクシュアリティを構築しているのであり（ここでは男からのプレゼントや奢りといったことを目的として、彼女達自身のセックスを交換している）、支配的イデオロギーに単純に従っているわけではないのである。

このことは、日本の若者、とりわけ少女のセクシュアリティ文化にもあてはまる。若者達は決して、国家の政策や支配的パワーに「画一的」に管理されうる従順な存在ではない。むしろ、支配的イデオロギーを経験するプロセスにおいて驚くべきほどの多様性が存在する。問題は、このような若者のセクシュアリティの複雑性、多様

性にどのようにアプローチし、分析のメスを入れるかである。

### 3. 若者文化のエスノグラフィー

どのような要因が若者のセクシュアリティの決定項となっているのでしょうか？ 仲間文化でしょうか？ 性教育といった学校教育でしょうか？ 家族関係なのか？ あるいは、マスメディアの影響が大でしょうか。その際、ジェンダー、階級、年齢といった要因は、どのように個人の経験に反映されているのでしょうか。

この古くて新しい問いにアプローチをしているのが、カルチュラルスタディーズの研究者達である。カルチュラルスタディーズは、1950年代の英国において、文学研究から派生した学問研究分野であるが、その後、その研究領域は拡大しつづけ、現在においては、若者文化の研究から、メディア、文化産業研究と多岐に及んでいる。今も尚、研究の刺激的展開が続いているため、定義づけの難しい学問分野であるが、近年、*The Cultural Studies Reader* の編集にあたったデューイング (During 1993) はカルチュラルスタディーズの原点を次のように述べている。それは、個人の「主観性 subjectivity」に焦点をあてた研究であり、「客観主義 objectivism」を廃し、個々人の生活との関連において文化を研究するものであるというのである。たとえば、カルチュラルスタディーズの古典ともいえる *The Uses of Literacy* (1957) は、労働者階級出身の著者ホガート (Hoggart) 自身の経験を通し、戦後の英国の変動が労働者階級の人々の生活にいかに関与したのかを描いたものであり、個人の主観的経験に焦点があてられている。

やがて、ホガートは、バーミンガムに移り、現在の the Centre for Contemporary Cultural Studies (いわゆる CCCS) を設立する。このセンターから、1970年代、優れた研究が次々と産出されるようになる。その代表作として、労働者階級の少年グループのカウンター・カルチャーを描いたウィリス (Willis) の *Learning to Labour* (1977)、視聴者が番組をどのように見ているのか、視聴者に対するエスノグラフィーに基づいて書かれたモーリー (Morley) の *The 'Nationwide' Audience* (1980)、そして、労働者階級文化にそれぞれの著者がアプローチした論文集 *Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-War Britain* (1976) がある。理論、アプローチに多少の相違はみられるものの、これらの作品のなかには、センターの創立者ホガートの研究伝統—個人の主観的経験への着目—が受け継がれている。

これらの研究は必ずしも、セクシュアリティのみに焦点をあてたものばかりではないが、若者のセクシュアリティ研究をする際、応用できる点が多い。なかでも、ウィリスによるエスノグラフィー研究は支配的イデオロギーと個人の経験の複雑な関連の謎を説き明かす鍵を提示している。ウィリスの研究対象であった英国の労働者階級の少年達は、支配的な中流階級イデオロギーが賛美するところの頭脳労働を決して肯定してはいない。むしろ、彼等は、その対局に位置する肉体労働にこそ「男らしさ」の意味を求め、その結果、父や兄と同様に肉体労働の道を進んで選択している。つまり、「社会的行為主体 Social Agent は、イデオロギーの単なる受動的なかつぎ屋ではなく、能動的な利用者であり、闘争、論争、そして構造の部分的な浸透によってのみ、既存の構造を再生産する」(Willis 1981:175) のである。ウィリスは、階級構造といったものが単に、構造化されたパワーによってのみ決定されるのではなく、若者文化のなかで消化され、意味づけされることによってのみ再生産されると主張する。

カルチュラルスタディーズの初期の研究は、ウィリス (1977) をはじめ、ホールやジェファーソン (Hall and Jefferson 1976)、ヘブディッジ (Hebdige 1979) といった男性研究者によって担われていたという点もあり、その研究対象も男性の若者文化に焦点をあてたものが多かった。このジェンダーバイアスに挑戦したのが、マクロビィ (McRobbie 1978,1991) やリーズ (Lees 1986, 1993) といった女性研究者である。マクロビィは、*Feminism and Youth Culture* (1991) の序章のなかで、女性のサブカルチャー研究の重要性を指摘し、「ティーンエージャーの少女達が彼女達自身の生きられた経験の文脈において、いかに、年齢、階級、ジェンダーといっ

た構造的決定要因を解釈しているか」(McRobbie 1991:X)を探究する必要があることを主張している。さらには、少女が規範的なジェンダー行動や役割の制約にどのように対処しているか、その「戦略」にも焦点をあてている。たとえば、リーズ(1993)は、少女達へのインタビュー調査を通して、この少女達が既存の「男らしさ」「女らしさ」の構造に従うだけでなく、同時に抵抗することによって、自分達の文化のなかでジェンダーアイデンティティを再構築しているその過程を明らかにしている。

これらの研究の焦点は、「生きられた経験 Lived Experience」という概念にいきつく。つまり、若者が若者自身の経験のなかで、いかに既存のイデオロギーを解釈し、またそれに反応しているかを解明することに研究視点が置かれている。この姿勢は、彼等の採った調査方法に如実に反映されているといえよう。たとえば、リーズ(1993)は、80年代に、ロンドンの3つの学校において、15-16才の100人の少女を対象に、学校、友情、家族、性経験、そして将来に対する展望に関して調査を行った。その際、彼女は Non-directive Semi-structured interview 方法を用いている。このインタビュー方法は、あらかじめ、質問事項を厳格に設定したり、質問用紙を配るといったことによらず、自由回答式の質問を行い、さらに、彼等が言葉にした事が一体、何を意味しているのかを重ねて尋ねる方法である。このインタビュー方法のねらいは、被調査者(若者)に彼等自身の回答を自由に拡張させ、被調査者(若者)がどのように、彼等の世界を彼等の言葉と意味合いにおいて捉えているのかを探究することである(Lees 1993: 8-11)。大人側、調査者側の若者文化に対する無理な理論付け、決め付けが横行するなか、少なくとも調査者の価値観、先入観を排除し、若者の視点から若者文化を捉えようとしているカルチュラルスタディーズの研究者の姿勢は大いに評価することができる。

カルチュラルスタディーズの若者文化研究はまた、1970年代に欧米で流行した「社会的再生産理論 social reproduction theory」(Deem 1978, Wolpe 1978, Barrett 1980)を塗り変える役割も果たしていることを忘れてはならない。1970年代の社会的再生産理論者は、学校のイデオロギーは、階級、ジェンダー構造に変革をもたらすどころか、それを再生産し、維持するものであると指摘した。学校教育こそが、学びたい若者にとって、活路を開く機会を提供すると信じられていた当時としては、この理論は、斬新なものであった。確かに、学校教育における教育方針全般、教材や教員配置、教員による男女学生の扱い方といったものにジェンダーバイアスがかかっており、これが若者、とりわけ、女子の進路を阻んでいるのは事実である。カルチュラルスタディーズの研究者達もこの点は否定していないが、彼等の主張は、学校のイデオロギーのみによって、少女達のジェンダーに対する価値観が決定するわけではなく、むしろ、少女達は、自分達の仲間文化、あるいはマスメディアといった学校以外の領域からの影響も受けており、自分達の文化のなかで、ジェンダーに対する意味づけや慣習を作り出しているということである。それが、ときには、既存の階級、ジェンダー構造といったものに対する「脅威」となりうる場合もあるのである。若者文化の「相対的自律性 relative autonomy」を浮き彫りにし、構造化されたパワーと主体的行為の関係を探究することの重要性を示唆したカルチュラルスタディーズの貢献は大きいといえよう。

#### 4. 若者の抵抗とジェンダーヒエラルキーの再生産

上記のカルチュラルスタディーズの若者文化の研究は、ひとつの重要な問題提起を行っている。すなわち、それは、若者が彼等の「文化産出 Cultural Production」において、どの程度の自律性を持っているのであろうかという研究課題の提起なのである(MacLeod 1995)。若者達は彼等が被る構造化されたパワーに、真の意味で抵抗を行っているのであろうか。

この問いに対し、若者は支配的イデオロギーへの抵抗を通して、それを再生産することに荷担しているにすぎないとジロウ(Giroux 1983)は喝破する。彼は、ウィリスの描いた若者 lads を例にあげ、労働者階級の少年達は、確かに、学校や公式のイデオロギー、規則といったものに反抗しているかもしれないが、彼等はその抵抗を、セクシズムやレイシズムといった支配的イデオロギーを駆使することによって行っていることを指摘した。

さらに、この労働者階級の少年達は、支配的イデオロギーへの抵抗の結果、労働者階級の仕事を選擇しているのであり、結局のところ、既存の階級構造を再生産してしまっているわけである。ここに、「反発行為といったものは、単に、権力への反発ではないかもしれない。むしろ、最強の支配的原理によって煽られ、またそれを再生産するところの権力を単に表現したにすぎないかもしれない」(1983:285)とジロウが主張する由縁がある。

少女の抵抗は少年のそれよりさらに複雑性を帯び、ジェンダー構造への抵抗を一層、困難なものにしている。確かに、少女達は、学校が教える清純＝「女らしさ」とする支配的イデオロギーにしばしば抵抗を試みる。たとえば、マクロビィ(1978, 1991)が調査した英国の労働者階級の少女達が学校の規範に反発している様を例にとろう。彼女達はその抵抗をメイクアップをしたり、セクシーな服を着たり、男の子について何時間も話したりするといった行為を通して行っている。つまり、学校の教える「女らしさ」の規範に対抗する際、彼女達は、より「女らしく」そしてセクシーな行為を通して行っているわけである。この抵抗の様子は、髪を茶色に染め、短いスカートとルーズソックスをはき、自身の春を売る日本の「コギャル」に共通するものがある。少女達は、自身のセクシュアリティを強調することによってのみ、その抵抗を完結している悲劇に気付くことはない。さらに、着目したいことは、この少女達はこの反発行為の末、早く結婚して、家庭を営みたいという願望を持つようになることである。とりわけ、大学進学、将来へのキャリア展望を認識しえない時、その結婚願望はさらに膨れ上る<sup>4</sup>。彼女達の反発行動は結局のところジェンダーによる役割分業を強化し、再生産するといった結果をもたらす。

彼女達をして、恋愛願望、結婚願望へと向かわすことについて、ホランドとアイゼンハート(Holland and Eisenhart 1990)による興味深いエスノグラフィー研究がある。ホランドとアイゼンハートは、当初、アメリカにおいて、なぜ科学や数学といった分野に女性が卒業後進出しないのかという点を解明するため(また、この分野におけるジェンダーバイアスを解明する必要のあった National Institute of Education からの資金援助のもとに)、調査に入った。調査中にこの2人の研究者はより大きな問題、つまり、大学に入った当初、優秀で、キャリア志向に燃えていた女子学生達の多くが、なぜ、大学在学中に、次第にそのキャリア志向を縮小していくのかという疑問につきあたる。やがて、2人は、女子学生の仲間文化こそが、彼女達を「性的なせり売り sexual auction block」の世界に駆り立て、その彼女達の文化のなかで、キャリアよりも恋愛や結婚が重要であるといった概念が作り上げられていることに驚愕する。つまり、ホランドとアイゼンハートは、ジェンダー役割分業を再生産するのは政府の政策や学校教育というより、むしろ、女子学生の「仲間文化」であるということを示唆している。

この点は、何も欧米のコンテクストのみにおいて、指摘されている点ではない。アブ・ルゴット(Abu-Lughod 1990)は、ベドウィンの若い世代の女性達を調査したが、彼女達は、ランジェリーやマニキュアを買い、装うといった行為を通して、性的に慎ましくなければならないとする道徳、あるいは、年長者の権威といったものに抵抗を試みている。しかしながら、皮肉なことに、この行為を通して、この若い女性達は、消費主義の世界と結び付いた「女らしさ」といったものに、より複雑に巻き込まれてゆき、そして彼女達はその事実を認識すらしていないのである。「権力の体系が複合的であるのならば、権力のある側面において抵抗することによって、人は権力の別の側面にまきこまれる可能性がある」(1990:53)というアブ・ルゴットの指摘は、ジェンダーパワーへの抵抗の困難さを説明するうえで、重要である。

ここで、強調しておきたいのは、ジェンダーパワーへの抵抗は、「意図せざる結果 unintended consequences」(Willis 1981:209)を招きやすいという点である。マクロビィの描いた英国の少女も、アブ・ルゴットの調査したベドウィンの女性も、日本のコギャルも、決して支配的イデオロギーに従う従順な存在ではない。それとは逆に、彼女達は、支配的ジェンダーイデオロギー(それは、女性は、恋愛や性行動において慎ましく、受け身的であれとするものであるが)を否定する対抗文化のなかで生きている。しかしながら、彼女達は、この反発行為を通して、「意図せず」に、よりセクシーでより女らしい文化を再生産してしまっている。やがては、これら少女達は、ホランドとアイゼンハートの描いたアメリカの女子学生のように、自分達の「仲間文化」のなかで、キャ

リアよりも、母や妻になることが最重要であるとするイデオロギーを再生産してゆく。しかも、彼女達は、自分自身が母や妻になることを強制されているのではなく、「喜んで」選択しているので、ジェンダーパワーに飲み込まれていることにすら気が付くことはない。いたるところに、ジェンダーパワーの「罠 entrapment」(Willis 1981:209)は存在し、少女の抵抗は、自家撞着に陥る。ここに、アブ・ルゴットが「抵抗をロマン化し、すべての抵抗を権力体系が働かず、支配されることを拒絶する人間の精神の反発と創造性のサインであると捉えがちな傾向」(1990:41-2)に警告を発する由縁がある。ジェンダーパワーといったものが非常に複雑に作用し、少女の抵抗を「意図せざる結果」に導きやすいことを鑑みると、この警告の重みは大きい。

#### 4. 今後の課題

急増の一途を辿る思春期のセクシュアリティをめぐる評論及び研究のなかで、少女の性の「乱れ」、あるいは、「援助交際」などといった言説がひとり歩きする。大人達は、若者がわからないとため息をつき、その「変化」のみに着目しがちである。しかしながら、我々は、若者の行動の性質を見極める必要がある。既存のイデオロギーと若者文化の関係は、決して単純なものではなく、複雑にからみあっている。この関係を明らかにするためには、カルチュラルスタディーズの研究者が行ってきたような若者文化のエスノグラフィー研究は不可欠であり、若者自身が彼等の恋愛や性経験をどのように理解しているかを考察し、そしてそれについて語ることに注意深く耳を傾ける必要がある。

いわゆるデートクラブ、テレクラ等に関わっている日本の「コギャル」は、性的に活発な文化の中で生きており、一見、女らしさ=清純の図式に挑戦しているかのように見える。しかしながら、少女達は、自身の女を売っているのであり、よりセクシーな「女らしさ」というイデオロギーが少女達のコミュニケーションネットワークを通じて、強化され、再生産されていく。マクロヴィ (1978) が調査した英国の少女達と同様に、彼女達の対抗文化そのものが、日本の少女達をしてジェンダーヒエラルキーの再生産へと向かわせる。

若者の対抗文化 counter culture はともすれば、支配的イデオロギーの罠にはまりやすい。とりわけ、ジェンダーパワーはきわめて複雑に作用し、少女達の抵抗すら飲み込み、既存のジェンダー役割分業を再生産する可能性を秘めていることを忘れてはならない。それゆえ、今後の若者のセクシュアリティ研究においては、性経験率の上昇といった「変化」のみに着目するよりも、むしろ、性経験のプロセスを通して、どのように彼等のジェンダーアイデンティティが形成されているのかを注意深く考察することが必要ではないかと考える。

(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究支援推進員)

#### 注

1. 思春期の性行動調査に関して代表的なものは、その他に東京都幼稚園、小、中、高等学校性教育研究会による調査がある。また、福武書店教育研究所 (1989) は、高校生を対象にその性体験、性知識に関して調査報告を行なっている。
2. 上野は、「ありていに言えば、セクシュアリティとは、「無定義概念」である」(1996:6)と喝破する。研究者により、「セクシュアリティ」という言葉が表象するものが異なるという上野の指摘は正しい。筆者自身のセクシュアリティの定義は、キルデレンとカーケンダールによる「セックスは股と股の間に、セクシュアリティは耳と耳の間にある」(石川他 1984:74-75)に基づく。つまり、セクシュアリティとは、心理、社会的側面も含め、文化的に構築されるものであり、人間のパーソナリティ全体にかかわるものであると解釈する。
3. フーコーがトップダウンの権力の概念を否定していることは、「権力は下から来るということ。すなわち、権力の関係の原理には、一般的な母型として、支配する者と支配される者という二項的、かつ総体的な対立はない」(Foucault 渡辺訳 1976=1986:121)に明確に表われている。
4. 筆者自身も、日本において、1校の中学校(公立)、3校の高等学校(内2校は公立、1校は私立)において1994年度の1年間、フィールド調査を行った。この4校において、29人の女生徒と20人の男生徒にインタビューを行った。さらに、その内から、6人の女生徒と4人の男生徒については、さらにインタビューを重ね、彼等の生活へのより深い洞察を試みた。筆者は、これらのインタビューに

において、女生徒や男生徒が、恋愛、性経験のみならず、学校、家族、友人、レジャー（マスメディアへの接触率も含む）、結婚、仕事、将来に対する夢についてどのように語るかについて、耳を傾けた。その際、インタビュー方法として、リーズ（Lees 1993）が英国において少年、少女を調査した時に用いた Non-directive, Semi-structured interview 方法を用いた。この自由回答式のインタビューを行うことによって、どのような要因が青少年のセクシュアリティを形成しているのかを明らかにしようと試みた。この詳細については、別稿で報告する所存である。

## 引用文献

\* 本論文の外国文献の引用は、Foucault の訳書『性の歴史 I』（渡辺守章訳：1986）によるもの以外は、原則として筆者の訳による。

石川弘義、斎藤茂男、我妻洋、共同通信「現代社会と性」委員会『日本人の性』東京：文藝春秋社、1984年。

上野千鶴子「セクシュアリティの社会学・序説」上野他編『セクシュアリティの社会学』1-24 東京：岩波書店、1996年。

川村邦光『オトメの身体 女の近代とセクシュアリティ』東京：紀伊国屋書店、1994年。

佐藤龍三郎「思春期の性行動に関する研究の動き－わが国における最近約10年間の文献から－」『Sexual Science』2(1)(1993): 59-63.

芹沢俊介「少女たちの迷走する性」大塚英志編『少女雑誌論』東京：東京書籍、1991年。pp. 177-202.

東京都幼稚園、小、中、高等学校性教育研究会編『児童、生徒の性』東京：学校図書、1993年。

日本性教育協会編『青少年の性行動：わが国の中学生、高校生、大学生に関する調査報告』東京：日本性教育協会、1994年。

福武書店教育研究所編『モノグラフ・高校生 '89 Vol.26 高校生と性』東京：福武書店、1989年。

宮台真司『制服少女たちの選択』東京：講談社、1994年。

———.『「郊外化」と「近代の成熟」－性の低年齢化と売春化の背景－』上野他編『セクシュアリティの社会学』東京：岩波書店、1996年。pp. 203-222.

Abu-Lughod, Lila. "The romance of resistance: Tracing transformations of power through Bedouin women." *American Ethnologist* 17(1) (1990): 41-55.

Barrett, Michele. *Women's Oppression Today: Problems in Marxist Feminist Analysis*. London: Virago Press, 1980.

Bordo, Susan. "The body and the reproduction of femininity: A feminist appropriation of Foucault." In *Gender/Body/Knowledge: Feminist Reconstructions of Being and Knowing.*, eds. Alison M. Jaggar and Susan R. Bordo. New Brunswick: Rutgers University Press. pp. 13-33.

———. *Unbearable Weight: Feminism, Western Culture, and the Body*. Berkeley: University of California Press, 1993.

Deem, Rosemary. *Women and Schooling*. London: Routledge and Kegan Paul, 1978.

During, Simon, ed. *The Cultural Studies Reader*. London and New York: Routledge, 1993.

Foucault, Michel. (originally published in 1976) *The History of Sexuality vol.1: An Introduction*. New York: Random House, 1978. (『性の歴史 I 知への意志』渡部守章訳 1986)

———. *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*, ed. Colin Gordon. New York: Pantheon, 1980.

Giroux, Henry A. "Theories of reproduction and resistance in the new sociology of education: A critical analysis." *Harvard Educational Review* 53(3) (1983): 257-93.

Hall, Stuart, and Tony Jefferson, eds. *Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-War Britain*. London: Hutchinson Press, 1976.

Hebdige, Dick. *Subcultures: The Meaning of Style*. London: Methuen, 1979.

Hoggart, Richard. *The Uses of Literacy*. Harmondsworth: Penguin, 1957.

Holland, Dorothy C., and Margaret A. Eisenhart. *Educated in Romance: Woman, Achievement, and College Culture*. Chicago: University of Chicago Press, 1990.

Jackson, Margaret. "'Facts of life' or the eroticization of women's oppression? Sexology and the social construction of heterosexuality." In *The Cultural Construction of Sexuality*, ed. Pat Caplan. 52-81. London; New York: Tavistock Publications, 1987.

Laqueur, Thomas. *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge: Harvard University Press, 1990.

Lees, Sue. *Losing Out: Sexuality and Adolescent Girls*. London: Hutchinson, 1986.

———. *Sugar and Spice: Sexuality and Adolescent Girls*. London: Penguin Books, 1993.

Lock, Margaret. "Protests of a good wife and wise mother: The medicalization of distress in Japan." In *Health, Illness, and*

- Medical Care in Japan: Cultural and Social Dimensions*, eds. Edward Norbeck and Margaret Lock. 130–57. Honolulu: University of Hawaii Press, 1987.
- . “New Japanese mythologies: Faltering discipline and the ailing housewife.” *American Ethnologist* 15(1) (1988) : 43–61.
- . “Ideology, female midlife and the greying of Japan.” *Journal of Japanese Studies* 19(1) (1993) : 43–78.
- MacLeod, Jay. *Ain't No Makin' It: Aspiration & Attainment in a Low-Income Neighborhood*. Boulder: Westview Press. Expanded edition, 1995.
- Martin, Emily. “Science and women’s bodies: Forms of anthropological knowledge.” In *Body/Politics: Women and the Discourses of Science*, eds. Mary Jacobus, Evelyn Fox Keller, and Sally Shuttleworth. New York: Routledge, 1990. pp. 69–82.
- McNay, Lois. “The Foucauldian body and the exclusion of experience.” *Hypatia* 6 (3) (1991) : 125–39.
- McRobbie, Angela. “Working class girls and the culture of femininity.” In *Women Take Issue: Aspects of Women’s Subordination*, ed. Center for Contemporary Cultural Studies Working Papers in Cultural Studies, Women’s Studies Group, University of Birmingham. London: Hutchinson, 1978. pp. 96–108.
- . *Feminism and Youth Culture: From ‘Jackie’ to ‘Just Seventeen’*. Houndmills, Basingstoke; Hampshire: Macmillan, 1991.
- Morley, David. *The ‘Nationwide’ Audience: Structure and Decoding*. BFI Television Monographs, 11. London: BFI, 1980.
- Mort, Frank. *Dangerous Sexualities: Medico-Moral Politics in England since 1830*. London; New York: Routledge and Kegan Paul, 1987.
- Peiss, Kathy. “‘Charity girls’ and city pleasures: Historical notes on working-class sexuality, 1880–1920.” In *Passion and Power: Sexuality in History*, eds. Kathy Peiss and Christina Simmons. Philadelphia: Temple University Press, 1989. pp. 74–87.
- Robertson, Jennifer. “Doing and undoing ‘female’ and ‘male’ in Japan: The Takarazuka revue.” In *Japanese Social Organization*, ed. Takie S. Lebra. 165–93. Honolulu: University of Hawaii Press, 1992.
- Ross, Ellen, and Rayna Rapp. “Sex and society: A research note from social history and anthropology.” In *Power of Desire: The Politics of Sexuality*, eds. Ann Snitow, Christine Stansell, and Sharon Thompson. New York: Monthly Review Press, 1983. pp. 51–72.
- Smith-Rosenberg, Carroll. “Writing history: Language, class and gender.” In *Feminist Studies/ Critical Studies*, ed. Teresa de Lauretis. pp. 31–54. Bloomington: Indiana University Press, 1986.
- Weeks, Jeffrey. *Sexuality and Its Discontents: Meanings, Myths, and Modern Sexualities*. London & Boston: Routledge & Kegan Paul, 1985.
- Willis, Paul. (Expanded edition in 1977) *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*. New York: Columbia University Press, Morningside, 1981.
- Wolpe, AnnMarie. “Education and the Sexual Division of Labour.” In *Feminism and Materialism: Women and Modes of Production*, ed. Annette Kuhn and AnnMarie Wolpe, Boston: Routledge and Kegan Paul, 1978. pp. 290–328.

\* 本稿は筆者の博士論文：“Politics, Pedagogy, and Sexuality: Sex Education in Japanese Secondary Schools” (Yale University : 1996) の一部に加筆訂正したものである。